

研究ノート

アンケート法による経済学系学生の 環境問題に対する意識の調査 II

藤 谷 健*

著者はさきに、大学の経済学系の学生の環境問題に対する意識を、アンケート法で調査しその結果を報告した。⁽¹⁾しかしそのときの調査は、調査対象の学生が著者の授業の受講生であったために、1年次から4年次にわたっており、やや均質性に欠けるきらいがあったこと、前回の調査後に入学した学生は、改正された高等学校学習指導要領（いわゆる平成元年告示の指導要領）に従った教育を受けた世代に替わっている（例えば、家庭科の男女共修などが大きな改正点）こと、更に前回の調査後にダイオキシンや環境ホルモンなど、当時はそれほど大きな問題とはなっていなかったり、あるいは従来は知られていなかった新規な問題がクローズアップされてきたことなどのため、改めて調査を行った。調査は無記名で行い、調査項目は前回と同じものに新しい環境問題に関する質問を付け加えて実施した。

調査対象は広島経済大学の平成12年度入学の新入生で、調査は新入生が入学直後に、必修科目として履修する「入門ゼミ」において、担当教員の協力により実施した。53あるゼミのうち44ゼミの協力を得て（協力率83%）、1001名の新入生のうち742名から回答を得た。回答率は74.1%であった。アンケートの設問と回答結果の集計は以下のようなものである。（質問票の形式は前回の調査のときと同じであるため省略した。）この中で4段階の選択肢の中から択一で回答を求める質問については、その選択肢の中でより積極的、あるいは賛成の選択肢から順に、+1, +0.5, -0.5, -1の重み付けをし、各々の回答数全体に対する百分率を乗じ、その総和をとって全体の傾向をみるのに用いた。この値は理論的には+100から-100の間にあり、値が正のときには肯定的、値が負のときには否定的な回答傾向であることを示している。

* 元広島経済大学経済学部教授

以下に結果を示す。

(1) 高等学校時代の環境問題の学習

高等学校におけるあなたの環境問題に関する学習について伺います。学習の程度は、

- ① よく学習した
- ② すこし学習した
- ③ ほとんど学習しなかった

でお答えください。

1 あなたは高等学校の社会科で、環境問題についてどのくらい学習しましたか。

- ① 8% ② 53% ③ 39%

2 あなたは高等学校の理科で、環境問題についてどのくらい学習しましたか。

- ① 7% ② 42% ③ 51%

3 あなたは高等学校の家庭科で、環境問題についてどのくらい学習しましたか。

- ① 6% ② 35% ③ 59%

(2) 地球環境問題への関心

あなたの環境問題への関心について伺います。以下の4～17の環境問題について、それぞれに対する関心の強さを

- ① 強い関心を持っている
- ② 多少関心を持っている
- ③ あまり関心がない
- ④ ほとんど関心がない

でお答えください。

	「関心ある」への偏り	順位
4 フロンによるオゾン層の破壊	+29	2
5 地球温暖化	+39	1
6 酸性雨の発生	+14	9
7 熱帯林の減少	+16	8
8 海洋の汚染	+21	6
9 河川、湖沼、内湾の水質汚濁	+20	7
10 化石燃料の燃焼による大気汚染	+5	13
11 野生生物の種の減少	+22	5

12	廃棄物（ゴミ）処理の問題	+27	3
13	重金属などによる土壌汚染	-25	14
14	砂漠の拡大	+13	11
15	放射性物質による人体への被害	+25	4
16	化学薬品による健康被害	+13	10
17	環境ホルモンの問題	+5	12

(3) ダイオキシンと環境ホルモンについて

最近とくに問題になってきたダイオキシンと環境ホルモンについて、あなたがどれくらいの知識を持っているか伺います。18～25の事項について、

- ① 知っている
- ② 知らない

でお答えください。

知っている割合

18	ダイオキシン量の単位として使われる「ng（ナノグラム）は10億分の1g」, 「pg（ピコグラム）は1兆分の1g」のことである。	15%
19	家庭用の小型焼却炉や野焼きでダイオキシンが発生するのは、主にビニール製品、サランラップ、アクリル繊維などを焼いたときで、ペットボトル、ポリ袋、フィルムケースなどからは殆ど発生しない。	28%
20	木綿、羊毛などの天然繊維や紙などを焼いても、ダイオキシンは殆ど発生しない。	57%
21	ゴミ焼却によるダイオキシンの発生量は、焼却温度が800℃以上の高温で、ろ過式の集塵機を備えた新型炉を使えば非常に低く抑えられる。	34%
22	環境ホルモンとは、それが生物体へ取り込まれたときに、ホルモンと似た作用を示す化学物質のことである。	27%
23	環境ホルモンのなかには生殖機能に影響を与えるものもあるため、この問題は単に生物に対する単純な毒性というだけでなく、生物の子孫にも関わる重大問題になる可能性がある。	57%
24	農業の DDT や HCH ばかりでなく、我々が日常使うプ	

- ラスチックの中にも、環境ホルモンの疑いのある物質が入っているものがある。 34%
- 25 ダイオキシンも、環境ホルモンの一種ではないかと疑われている。 21%

(4) 環境問題の社会的背景についての認識

資源開発やそれに伴う経済発展と環境保全はよく対立します。26～33の文章に示された考え方に対し、あなたは賛成ですか反対ですか。

- ① 賛成
② どちらかといえば賛成
③ どちらかといえば反対
④ 反対

でお答えください。

	賛成への偏り	
	今回	前回
26 地球環境問題は将来のために取り組むべき問題で、自分の生きているうちには危機的な状態になることはない。	-40	-43
27 地球環境の保全は人類にとって絶対なもので、そのために資源開発が遅れ、経済が停滞し、生活水準が後退するのも止むを得ない。	+5	+16
28 現代の生活は資源の大量消費による利便性の上に成り立っているのだから、その継続のために環境が少々破壊されるのも止むを得ない。	-44	-39
29 地球上の化石燃料資源は未開発資源を含めれば十分にあり、二酸化炭素による地球温暖化などはたいしたことはないのだから、火力発電所を増設し、原子力発電所は全廃すべきである。	-37	-51
30 環境保全には絶対という方法はないのだから、如何にしてリスクを小さくするかというように考えなければならない。	+56	+53
31 環境破壊の大部分は企業活動によるものだから、我々消費者が省エネルギーや資源節約に努力しても環境保全には殆ど効果がない。	-43	-45

- 32 先進国はすでに環境保全にある程度の対策をとっており、今後の環境破壊は発展途上国の工業化が主な原因となると思われる。 +10 - 4
- 33 現代の環境問題は地球温暖化やオゾン層の破壊といった地球規模の問題が大切で、水質汚濁や大気汚染のような問題はローカルで小さな問題にすぎない。 -65 -71

ここで得られた結果を、前回の調査とも比較しながら考察すると以下のようなことが言える。

- (1) 全体的にみて回答の傾向は、前回の調査と類似している。従って、学習指導要領の改訂に伴う環境教育への影響はそう大きなものではない。
- (2) 高等学校における環境教育は、主に旧社会科、現在の地理歴史科、公民科において行われているが、それも非常に不満足なものである。
- (3) 現代の若者が強い関心を持っている環境問題は、地球温暖化やフロンによるオゾン層の破壊のような地球規模の環境問題で、地域性の高い環境問題で高い関心を示したものはゴミ問題である。
- (4) ng, pg といった汚染物の量を示すのによく用いられる単位を殆ど知らない。このことは、環境汚染に対する科学的、定量的理解が殆ど出来ていないことを示しており、学生たちの環境理解が観念的あるいは情念的な段階に留まっていることを示している。
- (5) ダイオキシンや環境ホルモンなど、最近特に問題になってきた汚染物については、それに対する科学的知識が極めて乏しい。
- (6) にも拘らず、若者の環境問題に対する倫理観は健全である。

注

- (1) 藤谷 健、「アンケート法による経済学系学生の環境問題に対する意識の調査」、『広島経済大学創立三十周年記念論文集』, p. 387~405 (1998)